



上野幌育種場より

一 酪農家の熱意に応えるべく今年の仕事

乳製品ストックの増大から乳価値下げが大きく騒がれながらも、北海道、東北の各地では例外なく二割程度の牛乳増産をみているのはなんとしても心強い限りです。

多少の乳価変動にも動揺せず、生産基盤整備でこれを克服しているからこそ、これに耐えて増産が続けられているのでしよう。生産基盤の中でも最も重要な飼料部門関係の草に携って居ります私共も、全国酪農家の熱意、積極性に応えなければと、今年には更に一層の努力を誓い合っております。

二 牧草は混播か単播か

今更何をいうかと思われる方もありますが、牧草の高度生産という事から、暖地では単播の気運も一部には出て来ようように寒冷地でも特に東北地方ではこの事について論議している場面にも出会われましたが、私共の今までの試験調査結果では矢張り混播、しかも多種類混播で行くべきであると信じております。集約栽培で高度の生産を挙げる場合には単播栽培が確かに多収への道ではありませんが、自然気象条

単播と混播の多収かく栽培成績

| 区分 | 年度 | | | | |
|--------------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 一年目 | 二年目 | 三年目 | 四年目 | 五年目 |
| 赤クローバー単播 | 1,850 | 1,850 | 1,850 | 1,850 | 1,850 |
| ルサン、プロムグラス混播 | 2,100 | 2,100 | 2,100 | 2,100 | 2,100 |
| 少種類混播(三種類) | 2,100 | 2,100 | 2,100 | 2,100 | 2,100 |
| 多種類混播(七種類) | 2,100 | 2,100 | 2,100 | 2,100 | 2,100 |

件下、いわば「お天とうさんまかせ」の飼料栽培では多種類混播の優れている事はなんとせも否めません。参考迄に当場に於ける単播と混播の多収栽培の成績を掲げますが、或時期には単播は増収性も高くなりますが、永い目でみた場合(更新を頻繁に行なわない場合等)には多種類混播の方が安定増収が得られ、また飼料給与面での省力化等からみても有利のようです。

多頭化、省力化を急務とする寒冷地酪農の立地からみますと、混播特に多種類混播で行くべきと思われま。然しこの事については更にあらゆる角度から検討を進める計画をしております。

三 根菜の問題

労力事情の悪化から根菜をやめようという動きもあるようですが、問題は根菜の良さは誰しも認めながら手間がかかる、労働生産性が低いという事にあるようですが、まことに非化学的な表現にはなりません。

根菜の良さを「母の涙」に譬えている方もあります。分析すれば涙は水分と塩分以外の何物でもありませんが、決してそれだけでないわけでは。根菜もまた分析だけでは表われない或いは解明出来ないヨサがあるものと思われ、なんと冬期飼料の根幹として維持して行きたいと考えておりますが如何なものでしょうか。

ただ現状のような収量、労力ではやがては消え行くことも考えられますので、もっと高度生産を、しかも省力でということに

なりませんが、この事についてもっと相互にあらゆる角度から真剣な研究が必要と思われま。取敢えず私共の現在考えていることを述べますと、

○栄養生産量のある品種を利用すること、兎角生

鮮根重で品種の選定を行なっておりますが、今後は乾物率、或いはサイレージ給与時に特に必要な糖分等も重視した品種選定が必要でありま。この点では改良品種のご利用をすすめたいと存じます。

| 品種 | 項目 | 乾物率 | | 含糖度 | |
|------------|-------|------|-----|-----|-----|
| | | % | g | % | g |
| シニガーマンゴールド | M・G・M | 75.5 | 6.6 | 9.0 | 6.6 |
| B・G・B | M・G・M | 70.3 | 6.6 | 8.3 | 6.6 |
| パール・ストリーネ | B・G・B | 74.6 | 6.6 | 8.3 | 6.6 |

即ち乾物量や糖分からみますとM・G・Mはシニガーマンゴールドの七〇%、パールの五〇/六〇%の収量でも同一の乾物や糖分生産ということになります。

○省力化と、労力配分を考えた栽培を、

砕粒造形種子(一粒一芽種子)の利用、紙筒利用の移植栽培、耐病性品種利用による防除資材と労力の節減、除草剤利用。

等とまだまだ増収手段と省力化の方向、即ち労働生産性を高める余地があるようです。今年はこの面についても深く調査研究を進める計画でありますので、皆様のご意見をお待ち致しております。今年は一つ上野幌の圃場でジツクリこの事を討論研究したいと思っております。(根菜研究の青空教室を計画します)

四 今年の試験研究の方向

農業の本質からみて毎年変わるべきものはなく、今年も

(一) 飼料作物関係では夏型飼料の延長、

冬型飼料の高カロリー、高蛋白質に寄与する作物の選定、品種改良、栽培、利用法の研究の根本方針の下に、特に湿地牧野改良や、放牧の高度化を助長する草種の一つとしてメドウフェスクを重点的に取上げ、更に飼料作物全般に亘って病害対策に力を注ぎたいと思っております。

(二) 配合飼料では乳牛は原料乳地帯が多だけに、脂肪率を高めるためにも重要な従来の蛋白強調から高カロリー飼料(国の配合飼料規格変更もあり)の寒地向製品の研究と実験を、養鶏配合では多方向飼育即ちケージ養鶏の客観状況に鑑みて、鶏にとっては不自然な飼い方になるだけに一般栄養は勿論の事、微量成分についても完全な餌をと、今年には微量成分の研究実験を大きく取り上げております。

(三) 園芸関係では葉菜、果菜類については漸く世間に真価を問う育成品種の作出に適しましたので、今年には関係者の来場を心から歓迎し、忌憚のないご意見をお待ち致しております。また北海道特産種子である枝豆類の品種改良も更に大がかりに進めようとしております。

五 春のたよりの結びとして

作る農家、食わず酪農家の身になって研究、調査するのが私共のモットーです。出来るだけ栽培農家、飼育酪農家の希求するものを作出し、生産しなさいと心がけておりますが、それには絶えず實際家の意見をきくことが必要で、私共の仕事がよりよき方向に進むためには、皆様の断えざるご叱声が必要で。今年も長期研究に入場される方の申込みもあり、時期的計画下に来場研究を企画しているグループもありますが、読者の皆様もどうぞ自分の農場として気軽においでいただき、相互に酪農、園芸発展の研究農場としての役割を果たさしていただきたいと思います。(みうら)